

日本の宗教団体と教育機関 における宗教と科学の対話

予備的考察

金 承哲

Kim Seung Chul

本研究は、米国の「ジョン・テンプレトン財団」(John Templeton Foundation)より研究助成金を受け、2014年4月より2016年3月までの2年間遂行する予定である。英語の研究題目は、An Exploratory Assessment of the Science and Religion Dialogue in Japanese Religious Communities and Educational Institutions となっている。

本研究は、日本の宗教系学校や宗教施設における宗教教育の現状を分析し、宗教教育において宗教と科学の対話の成果を導入して用いられる教育教材(書籍、電子書籍、ITS教材等)を作成するための研究の一部であり、今期がその第一期目にあたる。

第一期の研究が終わる2015年には、第二期目の研究(2016年10月～2019年6月の33ヶ月)のための計画申請を行うことになっている。

以下においては、この研究の目的や遂行状況などを報告する。なお、以下の報告の内容の一部は、本研究の成果を公開するための以下のホームページにも掲載されている。

<http://science-religion.jp/> (英文)

<http://science-religion.jp/jpn/archives/category/videos> (和文)

問題提起

本研究は、日本の状況に関する批判的な評価を出発点としている。ヨーロッパ、北アメリカ、そして日本の学会における宗教と科学の対話の成果は、日本の宗教的実践と宗教教育に未だ活かされているとは言い難い。宗教的背景をもつ教育機関で、自然科学の分野での発見が誤って学生に伝えられるという事態もしばしば発生する。近代社会において科学的研究が人々の世界観、生活様式、そして自己理解に多大な影響をおよぼしている一方で、宗教は多くの人々の生活に関係のないものとして、しばしば家族や個人の古風で風変わりな伝統であると認識されがちである。さらにまた、宗教的洞察が科学にもたらしうる利点を顧みることなく、科学は自ら恣意的に宗教を無視し続けている。そのような状況は、宗教的信仰と科学的探求のいずれにとっても、確かな知を追求するというその本質に反していると言わなくてはならない。現状に対するこうした批判的視点に基づき、我々のプロジェクトはこの問題に向き合い、乗り越える道筋を追及する。

本研究が抱える問いかけ

① 今日の日本の宗教教育の現場において、科学的意識と知識はいかにして宗教の理解を豊かにすることが可能だろうか。

② 今日の日本社会において、宗教的意識と知識はいかにして科学の理解を豊かにすることが可能だろうか。

③ 科学と宗教の対話の成果はいかにして効果的かつ適切に日本の宗教共同体とその教育機関に取り入れられうるのだろうか。

活動と計画

研究計画の効果的遂行のために、当プロジェクトは二年間の企画段階とその後三年間の実行段階との二段階に設計された。現在のテンプレトン財団オンライン競争資金は企画段階のためのものであり、実行段階に備えてテンプレトン財団オンライン競争資金の申請を2015年4月1日までに提出する。実行段階では、企画段階で得られた見識をもとに、日本の宗教共同体とその教育機関で使用することができる、科学と宗教の対話についての質の高い教材を作成する。オンライン出願の提出締め切りの2015年4月1日から、実際のプロジェクト提案書を提出する9月1日までの期間は、研究者、宗教家、そして宗教教育者との企画段階の研究を継続し、実行段階への最終的な提案書が企画段階の成果を軸に展開するよう研究を続行する。

本プロジェクトの活動は、以下の二段階に分けられる。

企画段階：2014年4月1日から2016年3月31日まで（現オンライン競争資金）

実行段階：2015年10月1日から2019年6月30日まで（オンライン競争資金申請を2015年4月1日に申請）

企画段階の2年間は、研究者、宗教家、教師などがバランスよく参加するグループをつくるために、日程の検討に柔軟性をもたせ、リサーチ・セミナーとカリキュラム検討グループのミーティングを、それぞれ年に3回開催する。これらのミーティングは通常プロジェクトリーダーが所属する南山宗教文化研究所（愛知県名古屋市）で行われる。研究会は研究協力者の所属機関で開催される場合もある。

研究活動（その一）

リサーチ・セミナー（全6回）

日本の宗教教団にみる、生命論についての科学と宗教の対話の現状を概観する。年に3回、合計6回のリサーチ・セミナーを開く。各リサーチ・セミナーには研究メンバーの7名が参加し、生命論についての科学と宗教の対話という課題を、複数の日本の宗教教団が現在までどのようにとりあつかってきたかを検討する。「科学と宗教」という枠組みで捉えられるテーマは当然多岐にわたるが、その中でも「生命論」を特にとりあげたい。その理由のひとつには、イアン・ウィルマットの言う「生物学的管理の時代」にある今日の社会において、生命論については科学と宗教の双方の領域で活発な議論が繰り広げられていることが挙げられる。宗教は伝統的には生命の問題に決定権をもってきたが、自然科学もこの分野で独立した見解を表明するようになった。日本の宗教の現状を考慮した本リサーチ・セミナーは研究領域を日本のプロテスタント、カトリック、仏教、天理教その他の新宗教と、広範に設定する。そして、各々の宗教的伝統における科学と宗教の対話の具体例を検証していくことを課題とする。その初期調査のために、上記の宗教を専門と

する研究者によって研究班が組織された。研究メンバーは各々の研究対象である宗教共同体における現状を調査する。その過程で必要性があると認められた場合、議論される宗教教団から教師を招いてのリサーチ・セミナーを企画する。もちろん、リサーチ・セミナーのテーマはプロジェクトの進行の過程で発生し、新しいテーマもプロジェクトの経過の中で設定される場合がある。

研究活動（その二）

カリキュラム検討グループ（全6回）

日本の宗教共同体とその教育機関での宗教教育における科学と宗教の対話の現状を概観する。年に3回、合計6回のカリキュラム検討グループをもつ。各カリキュラム検討グループには7名の研究メンバー（宗教教育者、宗教家、及び研究者）が参加し、日本の宗教教育における科学と宗教の対話の現状を組織的に考察する。各カリキュラム検討グループは特定の宗教に着目し、プロジェクトリーダーは毎回2～4名の宗教教育者、2～4名の宗教家、1～2名の研究協力者を招聘する。とりわけ、宗教共同体とその教育機関（中学高校、及び大学レベル）での現行の宗教教育の授業において、科学的発見がどのように教えられているかに焦点をおく。当該の段階での成果を達成するためには、参加する宗教教育者、及び宗教家がいくつかの異なる宗教共同体を代表するものであることが極めて重要になってくる。そこでの議論をもとに、宗教共同体とその教育機関がいかにして科学と宗教の対話を授業の中に効率よく導入することができるかという、実際の教科課程の問題を考察する。

研究協力者からの1～2名の参加者に加えて、金城学院、名古屋学院（プロテスタ

ント）、南山学園（カトリック）、愛知学院、花園学園（仏教）の中学、高校、大学で宗教教育に携わっている教育者、また、地域共同体で現在宗教教育を行っているプロテスタント、カトリック、仏教の宗教家に参加を要請する。続く3年のプロジェクトの実行段階で、質の高い教材の適切な様式と内容を決定するために、宗教教育者の意見はきわめて貴重である。

研究活動（その三）

宗教共同体とその教育機関における宗教家、教育者、学生、信者へのアンケート調査

リサーチ・セミナーとカリキュラム検討グループの活動は、日本の宗教教育というコンテキストの実情に根ざしたものでなければならない。そのことを確実にするために、企画段階の初期に二つのアンケート調査を実施する。一つ目のアンケート調査は宗教家、宗教教育者、聖職者及び教員養成機関（大学の教員養成プログラム、キリスト教神学校、仏教大学専門学科等）で学んだ経験のある若い世代を対象とする。二つ目のアンケート調査は宗教共同体の信者と、宗教系の中学校、高校、大学の学生を対象とする。まずは研究メンバーの所属する教育機関から調査を始めていく。

二つのアンケート調査の結果は、後期3年の実行段階で作成される教材の適切な様式と内容を検討するために、企画段階の活動においてきわめて重要である。科学と宗教についての教科課程を作成するという最終目的に添った活動を続ける実際的な手段として、アンケート調査の結果はプロジェクトリーダーと研究メンバーがリサーチ・セミナー及びカリキュラム検討グループの

議論のテーマと講師を決定する際の指針となる。

以下はアンケートの質問の例である。対象によって若干の修正の可能性がある。

1. 宗教的真理と科学的真理の関係をどのように説明しますか。
2. 科学界での今日もっとも有意義な発展は何だと思えますか。その発展は宗教にどのような影響があると思えますか。
3. 宗教界での今日もっとも有意義な発展は何だと思えますか。その発展は科学にどのような影響があると思えますか。
4. 今日の日本において科学と宗教の対話は必要だと思えますか。必要、もしくはは不必要な理由も述べて下さい。
5. 日本の宗教共同体とその教育機関で用いられるならば、どのような教材が科学と宗教の対話を探求するうえで適していると思えますか。
6. 日本の宗教共同体とその教育機関において今日まで、宗教と科学の対話はどのように取り上げられてきたと思えますか。
7. 特定の科学領域、もしくは科学的論点に対して明確な関心を持ったことがありましたか。
8. 科学と宗教の対話についての積極的な関心を促すためには何が必要だと思えますか。
9. 科学と宗教の対話に積極的に関わることで宗教教育にどのような結果がもたらされると予測できますか。

アンケートを実施する際、キリスト教学校教育同盟、日本カトリック学校連合会、さらに仏教教育の大小の組織など、研究メンバーと関係のあるいくつかの日本の宗教教育機関の協力を要請する。

研究活動（その四）

プロジェクト文献表作成のためのデータ収集および研究成果と情報のオンライン電子共有

企画段階でリサーチ・セミナーとカリキュラム検討グループの効率を高めるために、プロジェクトリーダーは研究メンバーを必要に応じてデータ収集に関する会議に招集する。そこでは宗教団体が近年の科学的発見をどのようにあつちしているかについての公式の記録を作成し、関係書籍、論文、VTRを収集する。文献表をもちいることで、リサーチ・セミナーとカリキュラム検討グループが単なる議論に終わることを回避するためだけでなく、実行段階での教科書や教材作成にとっても重要である。参加している研究者が収集したデータにアクセスしやすいように、南山宗教文化研究所のプロジェクトリーダーホームページに定期的にアップロードするか、リストを掲載する。[\(http://nirc.nanzan-u.ac.jp/en/staff/kimseungchul/\)](http://nirc.nanzan-u.ac.jp/en/staff/kimseungchul/)

データ収集に関する会議はプロジェクトリーダーが所属する機関の所在地である、名古屋の地元研究者が協力するために、さらに定期的に会議をもつことがある。会議の公式メンバーはプロジェクトリーダーが2008年から参加してきた「宗教と科学の対話読書会」の参加者で構成されている。研究メンバーは随時研究成果と関連資料をホームページにアップロードして共有する。

さらに、データベースは研究成果を公にするタイミングと方法を議論し、決定するために有益である。また、参加する研究メンバー間の意見交換を潤滑にし、それらの意見にプロジェクトの進展を反映するために、Facebookなどのメディアを通じてより広範に研究成果を公開していく。このホー

ムページと Facebook の利用は、宗教教育の場で使われうる質の高い教材を作成すると言う最終目的からしても特に有用である。効果的かつ効率的にこれらの重要なコミュニケーションツールを管理するために、コンピュータやソーシャルメディアでの専門知識を持つプロジェクト研究アシスタントを採用する。

研究活動の構成員

リサーチ・グループ・メンバー

本プロジェクトの成功は科学と宗教の対話の価値に一貫した関心を表明した研究者と教育者の協働にかかっている。したがって、プロジェクトの企画段階では下記の研究メンバーと、各々が関係する宗教教団からカリキュラム検討グループへの参加者として推薦された宗教家、教育者とともに活動を開始していく。参加研究メンバーは以下の通り(名前の後に宗教的背景、所属機関、専門を記載)。また、必要に応じて他の研究者も招聘する。

プロジェクトリーダー

金承哲 (プロテスタント。南山宗教文化研究所。組織神学)

研究協力者

芦名定道 (プロテスタント。京都大学。キリスト教学)

トーマス・J・ヘイスティングス (プロテスタント。Japan ICU Foundation。実践神学・宗教教育哲学と方法論)

廣田デニス (仏教。龍谷大学。仏教学)

小原克博 (プロテスタント。同志社大学。キリスト教倫理)

小柳義夫 (カトリック。神戸大学大学院。物理・情報学)

澤井義次 (天理教。天理大学。宗教学)
佐々木閑 (仏教。花園大学。仏教学)
田中ケネス (仏教。武蔵野大学。仏教学)

カリキュラム検討グループ・メンバー

金承哲 (南山宗教文化研究所)
深井智朗 (金城学院大学)
大宮有博 (名古屋学院大学)
北垣創 (名古屋学院大学)

2014 年度の研究活動 (それぞれの研究会における発題者と発題を記す)

リサーチ・セミナー

第一回 (2014 年 7 月 19 日)

佐々木閑「科学と仏教の間の二つの接点」
芦名定道「宗教と科学の対話の可能性：研究と教育の視点から」

第二回 (2014 年 10 月 25 日)

金承哲「宗教と科学の統合」

第三回 (2015 年 3 月 25 日)

小松美彦「『人間の尊厳』概念の歴史的考察」

カリキュラム検討グループの研究

第一回 (2014 年 8 月 2 日)

深井智朗「宗教は教えることは可能か」
北垣創「宗教と科学：授業での試みを通して」

第二回 (2014 年 10 月 26 日)

島田勝巳「天理大学における宗教教育」

第三回 (2015 年 3 月 28 日)

川村覚昭「仏教教育(学)の現在：『日本仏教教育学研究』の研究論文の動向を通して」

きむ・すんちよる
南山宗教文化研究所第一種研究所員